

# 増殖する空間について

—ジャン・デュビュッフェの平面によるウルループからの考察—

専攻 教科・領域教育学  
コース 芸術系(美術)  
学籍番号 M08205K  
氏名 表 陽子

## 1. 研究の動機と目的

ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet 1901-1985)は1962年-1974年にアメイバー状の細胞が絡み合ったような画面を持つウルループという一連のシリーズを制作している。私はこのウルループシリーズの直前に描かれた「アイルランドの踊り」という作品から、目の焦点の定まらない不思議な感覚と、細胞や生物が増殖していく様子を想起し、魅力を感じた。増殖という現象からは生命の営みを思い浮かべる。

平面による初期のウルループも同じように画面の中で、細胞がうごめき、躍動している作品がある。まるで、画面という小さな枠の中でいくつかの形体が生きているようである。デュビュッフェはどのような過程で、この躍動感あふれるウルループを制作するに至ったのだろうか。本研究では、デュビュッフェがウルループの作品を制作するまでの過程やウルループの造形的特徴を考察する。

そして、増殖するという要素を取り上げ、その視点から、再度平面によるウルループを考察し、それが絵画空間にどのような効果をもたらすのか、また、絵画の表現の可能性を広げる要素となりうるのかを検証する。

## 2. 論文の構成

はじめに

### 第1章 ジャン・デュビュッフェの思考

#### 第1節 デュビュッフェの生い立ち

- 第1項 幼少期
- 第2項 画家になるまでの模索
- 第3項 画家としてのデビュー

#### 第2節 反文化的な立場

- 第1項 文化に対する猜疑
- 第2項 アール・ブリュット

#### 第3項 デュビュッフェと文化

### 第2章 ウルループの造形的特徴

#### 第1節 マチエールと素材に向けられた関心

- 第1項 厚塗りとはっかき
- 第2項 型押しのアッサンブラージュ
- 第3項 パリ・サーカス

#### 第2節 平面によるウルループの造形的特徴

- 第1項 ウルループの展開
- 第2項 境界線、色面及び形体
- 第3項 色面に覆い尽くされた画面
- 第4項 ウルループに描かれる具象物

#### 第3節 立体によるウルループの造形的特徴

- 第1項 立体への移行
- 第2項 もの化する細胞

### 第3章 ウルループの中に感じる増殖

#### 第1節 増殖する空間

- 第1項 「アイルランドの踊り」を見て
- 第2項 増殖すること
- 第3項 集合体恐怖症

#### 第2節 絵画空間における増殖の定義

- 第1項 増殖するウルループとしないウルループ
- 第2項 増殖する画面
- 第3項 増殖する絵画空間の定義

#### 第3節 ウルループの独自性

- 第1項 画面の中でひしめく細胞
- 第2項 ファルバラ荘にて

#### 第4節 増殖していくウルループ

- 第1項 生と死の狭間にある増殖
- 第2項 無数の視線
- 第3項 増殖の普遍性

おわりに

## 3. 研究の概要

第1章では、まずウルループを生み出したデュ

デュッフェの人物像を知るために、その生い立ちと思想を概観した。

デュッフェは家業のため、41歳という遅まきの年齢で画家になる決意を固める。若い頃のデュッフェは教養や知識を身につけながらも、何かすれ違いを感じ、そして自分を取り巻く現実の世界に疎外感を持っていた。こうした日々の模索から、デュッフェは文化に対して猜疑を持ち、また、制作に対しても独学でなければ自分のものにならないと考える。この考えは、自らの制作だけでなく、文化にとらわれないアール・ブリュット(生の芸術)への関心につながる。アール・ブリュットとは、デュッフェが付けた名称で、精神病患者など芸術的教養に毒されていない人々が制作した作品を指す。アール・ブリュットの影響を受け、デュッフェ自身もそれまでの伝統的な絵画手法にとらわれず、荒々しく強烈なイメージと質感を強調して作品を描いた。こうしたデュッフェの革新的な作品は、後のアンフォルメル運動の先駆けとなる。

第2章では、従来の制作方法にとらわれずに、自らの表現方法を模索するデュッフェがどのような作品を展開し、ウルループを描くに至ったのか考察している。

人間の本质や人間性をアール・ブリュットに見出し、触発されたデュッフェは、マチエールと素材へ関心が向けられていった。これらを強調することで精神を表現できると考えたデュッフェは当初、泥やアスファルトのこね土、ガラスの破片などを絵の具に混ぜ、画面をこすったり、ひっかいたりなどしている。そして、自らの技法を試行錯誤しながら切り開いていく中で、絵の具を押し付けた紙を様々な形に切り、貼りあわしたアンプラント(型押し)のアッサンブラージュ(寄せ集め)を制作し始める。この型押しと寄せ集めの画面は、ウルループの色面が連続し、累積している点で共通しており、ウルループの誕生を予感させている。しかし、物質性を強調した作品を追究していく中で、自身の観念の固定化から崩壊を恐れたデュッフェは、一変して、物質を感じさせない作品を描き始める。そして、電話中の落書きをきっかけに、デュッフェはウルループシリーズの制作に取りかかる。ウルループはジグ

ソーパズルのように、境界線が複数の色面を形作っており、そして、それらが全面を覆い尽くしている。さらに、細胞のような色面が複雑に絡み合っているため、鑑賞者は隣合う色面に次々に焦点を移し、目の先が定まらない感覚を受ける。このウルループシリーズは徐々に、図と地の違いが明確になり、平面から立体へと展開されていく。

第3章では、ウルループの中に感じる増殖について、論じている。ウルループの作品の中には、増殖するような躍動を感じさせる画面がある。その要素を調べるために、まず増殖の意義について述べた。増殖とは増えて多くなること、もしくは生物の繁殖を意味する。生物界において、生命が誕生してから、増殖は延々と繰り返されてきた営みであり、この世界を構成する要素ともいえる。つまり、増殖する様子から私たちは生を思い浮かべる。

また、ウルループの他に草間彌生などの他の作家による作品を元に、増殖の要素について検証し、これらの共通点から同じ種の個体が無数に集まった様子が増殖を想起させるのではないかという結論にいきついた。そして、本論文における、増殖を感じさせる絵画空間を「似た大きさや形の個体が無数に集まり、その集合体から生命の営みを想起させる画面」と定義をつけた。

増殖を感じさせるウルループの画面は、それぞれの色面に特徴がある。また、個の存在を主張しながら、それらが集まり全体を作りあげている。こうした画面からは、普段私たちが知ることのない顕微鏡の中の世界を思い出させる。ウルループの画面からは、そんな私たちの見ている世界が一部分でしかないことを見ている者に気づかせる。

今後の課題として、今回デュッフェのウルループを主に取り上げ考察してきたが、デュッフェ以降、増殖を感じさせる空間がどのように展開されてきたか、さらに掘り下げ考察したい。

#### 4. 主要参考文献

- 『ジャン・デュッフェ展』、展覧会図録、富山県立近代美術館、1997  
『20世紀絵画の展開』カタログ、名古屋市美術館、1988  
ハーバート・リード著、滝口修造訳、『芸術の意味』、みすず書房、1966  
星野泰也著『視覚でとらえるフォトサイエンス 生物図録』、数研出版、2000

主任指導教員 杉山直樹  
◎指導教員 大西 久